

ボラみ隊が行く!

ボラ体験レポート編

ボラみ隊とは…
『ボラみみ』に掲載された団体に足を運んでボランティア活動を体験したり、ボランティア活動をしている人たちと交流する、「ボランティアしてみたい」「見てみたい」という人たちの集まりです。

ボランティア活動の魅力の1つは、普段なかなか接する機会のない方たちと交流ができること。今回も、新たな分野に一歩足を踏み入れたボラみ隊の2人が、交流を通して感じた様々な気づきを紹介してくれます。



REPORT 1

特定非営利活動法人 花*花

誰もが地域で自分らしくいきいきと働き暮らすために

特定非営利活動法人 花*花は、知的障がいのある利用者さんが得意なことを活かして、軽作業や弁当の調理・配達、Tシャツデザインなどの仕事を行うことで、社会のルールを学びながら地域で暮らしていける力を育てる活動をしています。利用者さんと一緒に、軽作業や余暇活動を行うボランティアに参加しました。

気持ちを汲み取る

ボランティア当日、ドキドキとわくわくの混ざった気持ちで作業所のドアをゆっくり開けると、利用者の皆さんが黙々と作業をする姿がありました。私に気づいた1人が大きな声で「こんにちはー」と言ってくれ、自分が受け入れられたような気持ちになり、ドキドキの部分が少し和らいだように思いました。

花*花の作業所ではスタッフが4人働いており、障がいのある方が13人利用しています。軽作業は割り箸の袋入れ、シール貼りなど、単純ですが根気のいる仕事です。私が担当したのは、利用者さんの貼ったシールがずれていないかを確認する作業です。ずれている場合は、注意をして直してもらいます。

一緒に作業した方はほとんど会話ができませんでしたが、話しかけたり注意したりすると、ちょっとした動作などで反応が返ってきました。スタッフの話では、みんな自分の意志ははっきりと持っており、ただそれをうまく周りに伝えることができないということでした。最初は、ずれる頻度が多かったのですが、回数を重ねるうちにその頻度は少なくなり、スムーズに作業ができるようになりました。利用者さんがどんなことを考えているのかをうまく汲み取ることが、コミュニケーションをとるのにとっても大切な要素だと感じました。

花*花とボランティアの関わり

「利用者さんだけでなく、地域の人たちも含めた誰もがいきいきと暮らしていける場所を目指したい」という理事長の江部真弓さんに、ボランティア終了後、お話をうかがいました。

普段、私たちが街に出かけたときに、知的障がい者と思われる人に出会うこともあると思います。そのとき、皆さんはどういった気持ちになるのでしょうか? 「話しかけられたいやだな〜」「怖いな〜」とか、そこまでいかないうちでも、「どうしたらいいかわからない」といった気持ちを抱くかもしれませんが、話しかけられたときは、優しく答えをあげてください。もし困っている様子であれば、優しく声をかけていただければうれしいです」と江部さんは話します。知らないがゆえに起きてしまう偏見があります。花*花に来るボランティアが利用者さんと接することで、少しずつ偏見が解消されていきかけになればよいと思います。

また、ボランティアが来てくれるだけでもよい刺激になるということです。利用者さんは家族やスタッフ以外の関わりが少ないため、ボランティアと話をしたり、一緒に作業したりすることが社会性を養うこととなります。

ボランティアを終えて

花*花でのボランティアの目的は、作業を手伝うというよりも、外部のボランティアと利用者さんが関わることで、知的障がい者と健常者がともに暮らしやすい地域をつくることにあると思います。知的障がいのある人たちは、自分の意志を表現するのが苦手です。この事実を多くの方が周知し、誰もが助け合える地域社会になればよいと思いました。



体験・文

ボラみ隊 山城敬一
会社員をしています。仕事の休みや定時にボランティアをしています。



REPORT 2

サギップ・ジャパン

歌と笑顔で、みんなの思いを届けよう ~フィリピン台風の被災者に支援を! 音楽と民族舞踊の集い~

その日、東別院ホールは異国の雰囲気と熱気に包まれていました。フィリピン人シンガーにお坊さんバンド、各国の民族舞踊がステージを盛り上げ、客席の大人も子どもも、みんな一緒に歌い、踊る。遠い地で被災した仲間、1日も早く元の生活を取り戻してほしいという願いをこめて。

思いをひとつに

昨年11月にフィリピンを襲った大型台風は1600万人もの人々に多大な被害をもたらしました。そして未だ、多くの被災者が家も仕事もない状況で飢えや病に苦しんでおり、継続した支援が求められています。

今回開催されたイベント『BENEFIT CONCERT & CULTURAL PERFORMANCE ~フィリピン台風の被災者に支援を! 音楽と民族舞踊の集い~』は、日本在住のフィリピン人による、フィリピン台風被災者復興支援コンサートです。主催者のサギップ・ジャパンは、災害などで被害に遭ったフィリピン人の支援を主な目的とする団体で、日本では東日本大震災の直後に設立されました。

私が担当したのは、出演団体を着替えやメイクのために使用する楽屋へ誘導する係で、8つの出演団体を3名のボランティアで分担しました。団体8つに対して楽屋は階を分けて2部屋のみ。使用時間が限られているため、正確に誘導しなければなりません。ところが、いざ始めてみると、予定より早く来る団体や、まだ全員揃わないので時間を分けて使いたいという団体、はたまた小道具が紛失するなど、不測の事態が後を絶ちません。私たちはその度に慌てていましたが、そんな混乱の中でも、ステージ裏のフィリピン人スタッフは笑顔を決やらず、少しぐらいのミスやトラブルなど気にしない様子で動き回っていました。常に焦っていた私も、だんだん肩の力が抜け、楽しむ余裕が生まれました。

大切なのは、正確な進行よりも、みんなで楽しむこと、思いをひとつにすることなのだと思いました。

できることを持ち寄って

楽屋に用意されていた出演者のお弁当はスタッフの手づくりで、飲み物はセカンドハーベスト*からの寄付、配布されたスタッフTシャツにはELCC(国際子ども学校:在日フィリピン人の子どもたちの学校)の生徒たちが折り紙で作ったハートのメッセージカードが添えられています。こ

うした一つひとつの思いに、このコンサートが支えられていることを知り、あたたかい気持ちになりました。

印象的だったのは、フィリピン人のみなさんの強い団結力と子どもたちの無邪気さです。子どもたちは初めて出会う大人を怖がらず、ニコニコと笑顔を向けてくれます。大らかで明るくて人懐っこい大人たちに囲まれて育ったため、幼い時から人と触れ合うことに慣れてるのだと思いました。

子どもたちに危険なことを教えるのも必要だけれど、より多くの安心を伝えてあげることが大切だと思います。いざという時に、家族や友人という枠にとらわれず、誰もが当たり前のように集まり、それぞれができることを持ち寄って、みんなで困難を乗り越えようとする力が、これからの私たちには必要です。それは何よりの安心となり、強みになると感じました。

フィナーレに参加者全員で歌った「We Are The World」が、みんなの思いを乗せて、フィリピンの被災地まで届いてほしいと願っています。



いろいろな言語で「ありがとう」と書かれています

6カ国、100名以上の出演者によるパフォーマンス。あっと1時間の3時間でした



体験・文

ボラみ隊 岡島民佳
今回初めてボランティアに参加しました。とても楽しかったし、気づくこともたくさんあって、貴重な経験になりました。

団体紹介

特定非営利活動法人 花*花
名古屋市千種区神田町31 20
TEL/FAX: 052-721-2585 E-mail: hana_hana200504@ybb.ne.jp
URL: www.geocities.jp/hanahana200504

団体紹介

サギップ・ジャパン
名古屋市中区栄4-15-14 栄ハイホーム616 FMC内
TEL/FAX: 052-242-8360 E-mail: sagipjapan@gmail.com
URL: http://sagip-migrante.blogspot.jp/

* 特定非営利活動法人 セカンドハーベスト名古屋:品質に問題はないが、印字ミスやパッケージの破損、賞味期限が近い等の理由で毎日大量に廃棄される食品を、社会的弱者であるホームレスや外国人等の支援団体へ供給する「フードバンク活動」を行っています。